

第 5 章

研究の成果と課題

1 今年度の研究のまとめ

平成24年度～26年度の3年間にかけて実施された第6次研究の成果と課題を受け、「卒後を見据えたキャリア発達を促す指導法の研究」として、第7次研究がスタートした。

「課題研究」では、生徒のコミュニケーション能力の課題に向き合うために、生徒同士がお互いに関わりながら学習する「協同学習」の方法を取り入れた授業実践を、全員が授業を公開する「全員授業研究」という方法で取り組んだ。

「寄宿舍の研究」では、生徒の生活に関わる問題に向き合う生活指導の充実を目指して、6事例を抽出し、事例が抱く生活課題に対してどう指導していくかを検討した。

「プロジェクト研究」では、「今養版キャリアプランニング・マトリックス（試案）」を用いた授業実践において、生活単元学習を中心にマトリックスの観点为指导内容と結びつけにくいなどの課題が挙げられていたことに加え、平成28年度から新しい学校教育目標に変更されるため、マトリックスの見直しを行った。

（1）成果

① 授業力・指導力の向上

課題研究では、MTとなる授業者全員が指導案を作成し、授業を公開するようにした。授業後はレポートを作成し、自分の実践をふりかえることで、授業者が自身と向き合い、授業の改善や、実践に関する疑問について考えるきっかけになった。また、協同学習を実際に取り組むことで、生徒が自主的に活動に取り組む姿のみならず、実態差のある生徒同士がお互いに学び合う協同学習をどのように行ったらいいのかなど、新しい課題を見つけることができた。

寄宿舍の研究では、事例研究を通して、様々な教材を活用しながら、生徒の課題についてどのように指導を行うかをチームで取り組み、指導力の向上につながった。

② マトリックスの改訂

「今養版キャリアプランニング・マトリックス（試案）」であるが、国立特別支援教育総合研究所の「知的障害のある児童生徒のキャリアプランニング・マトリックス（試案）」と比較しながら、現在の本校の生徒の実状に合わせたものに改訂することができた。今後、各教科、領域・教科を合わせた指導の年間指導計画の見直しに活用することが期待される。

③ 学舎連携の継続

研究推進委員会に寮務主任や寄宿舍の研修部が参加するとともに、職員室にて寄宿舍の研究の中間報告を行い、寄宿舍の研究の状況を、学舎で確認できるようにした。今後は、研修部だよりを寄宿舍でも回覧をしたり、寄宿舍の職員も、授業公開に参加するなど、さらに学舎が連携しながら、指導に当たることができるようにしていく。

(2) 課題

① 職員の協同を進める研究・研修

課題研究では個人作業が中心となり、また、協同学習の取り入れ方について、検討を研究全体会議の場で議論するなど、組織的に深める手続きを欠いていた。シンプルで進めやすさはあったものの、職員同士が交流しながら進める部分では弱さがあった。寄宿舎の職員を含めて、職員同士が交流しながら、同じ目的へ向かって学び、検討を深める場が設定できるようにしていきたい。そうすることで、校内研究の場がチームビルディングにもつながっていくものと考えている。

② 新しいマトリックスの運用

マトリックスを改訂したものの、具体的に活用することはこれからの課題である。マトリックスに基づき、指導内容表の見直し、各教科の全体計画を作成するとともに、作業学習と生活単元学習について、マトリックスを実際に運用してどのような効果があるかを検証していく必要がある。

③ 教職員の専門性の向上

どの研究でも、よりよい授業作りや指導を行うために、さらに学び続ける必要がある。課題研究では協同学習を、寄宿舎の研究では事例研究を中心に、実践を深めていく。

④ 協同学習の成果の把握

協同学習の成果を評価する方法を検討し実施しない限り、協同学習の効果を測定できないため、評価方法を検討していく。

2 次年度に向けて～第7次研究2年次について～

本研究は卒業後の生徒の課題から、その課題を解決するためのヒントを探るために、課題研究として「協同学習」を取り入れた授業実践を、寄宿舎の研究として「自己管理能力」「生活指導」をキーワードに、実施したものである。

課題研究では、協同学習を取り入れた授業を、まずは全員で実践することにした。実践する中で、生徒の実態差に応じた授業展開の工夫や、協同学習の5つの要素を全て取り入れることが難しいなどの課題があった。

また、若い教員にとって、授業を作ることに悩むことが多かった。そのため、同僚からのアドバイスとともに、授業を作るポイントを示したマニュアルがあれば、協同学習を生かした授業づくりに取り組むことができるのではないかと考える。

寄宿舎の研究では、指導観点を生かした実践を引き続き行い、さらに事例研究を進めていく。